

---

# GOD EATER ALTERNATIVE LOG

ノンサイクル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

G O D   E A T E R   A L T E R N A T I V E   L O G

### 【Nコード】

N 8 5 2 0 W

### 【作者名】

ノンサイクル

### 【あらすじ】

新しい世界が始まった化け物「アラガミ」としての生活。

親切なおばあさんの下で日々をほのぼの六割・シリアス四割・説明成分多数でお送りします。

若干主人公はチート気味の能力ですのでチートご都合主義等が苦手な方は戻るボタンを連打することをお勧めします。

この作品の作者は感想を栄養分に執筆していきますので時間があれば感想お願いします。

またこの作品は試作段階のものでいきなり大幅な改定や統合

を行う可能性があります、ご注意ください。

## 第0話 アラガミ、大地に立つとのこと

なぜこうなったのかはわからない。

俺は普通とは言えない成績だったがなんとか単位を落とすことなく大学を卒業したはずだった。

今のアルバイト先でこのまま就職することも決まり社会人生活が幕を開けるはずだった。

なのに・・・俺はあっけなくこの世からはじき出されてしまった。

いつもどおりに終電電車に乗り下宿先に帰ろうとしていた。

ただそれだけだったのに、そうただそれだけだったのに、俺はホームから落ち電車にひかれて死んでいった。

まあ、ここまでではいいでしょう、だが・・・これはないだろう？

死んだはずの俺の目の前に広がるのは花畑でも川でもなく。

見たことのない神社らしき建造物の内装だった。

### 第0話 アラガミ

どうも俺は死んでいなかったらしいがなぜに神社に居るのかは全く持って不明。

H A H A H A なんだか全身の感覚がおかしい気がするけど気のせいだ、ああ気のせいに決まってる。

そうだよな俺は四足歩行なんてしていないよな？



## 第1話 アラガミ、ばあさんに出会ったこと

そんなことがあってから二時間後、おばあさんの計らいによりこの神社に居座っていることに・・・  
なんという二ート。

第1話 荒神、おばあさんと生活すること

「おやまあ、お前さんは犬ではないのかえ？」

「ガウ！（おう！）」

なんとこのおばあさん、いい人だ。

いきなり自分の神社に現れた怪物に対してこの対応。  
俺は慈母の神をここに見た！

「それも人の言葉が分かるのかえ、お利口だねえ」

「・・・」

その後、おばあさんに鏡を見してもらったのだが・・・  
この容姿に自分は見覚えがあった、そうそれは・・・  
アラガミ、ゴッドエーターというゲームの敵モンスターその中でも最弱クラス的能力である「オウガテイル」という種類のものに酷似しているのだ。

「グルルルル・・・（ええええ・・・）」

「どうしたのえ？落ち込んだるのか？」

いやだつてさ、ばあさん。  
いきなり化け物に転生？憑依した拳句にそれはゲーム内では最弱の奴でしたーってさ。  
これはないわ。

「グウウウウ（せめてヴァジュラとかならよかったのに）」

「何に落ち込んだるのかわからんがお菓子でも食べるかえ？」

おおおお、お菓子ですと！？

なんだか無情に腹が減っていたんですよ。  
ぜひ食べさせてくださいな！

「グルルル！（くれ！）」

「おやおや、そんなにがつつかなくてもちゃんとおあげますよ。」

そういってばあさんは奥にお菓子を取りに行った。

さて、これからのことを考えよう。

こういう時はネガティブになっちゃいけないってTVで心理学者のお偉いさんが言っていた。

まずはだ、現状確認をしよう。

ここはおそらく日本、それも俺の勘が正しければ1960年代。

ここは古びた神社で居住者はばあさん一人のみ。

そして問題なのはここからだ。

俺はアラガミとなってしまうている、それもオウガテイルだ。

すでに人よりも大きく、その気になれば一人ぐらいなら頭から人  
のみにしてしまえる。

さらに俺の体はおそらくアラガミなので不思議物質「オラクル細胞」で構成されている可能性が非常に高い。

すなわち、オラクル細胞の基本性質「自己進化」「自己再生」「自己増殖」を持っているだろうということだ。

このオラクル細胞は「既存の（2050年という近未来の）あらゆる兵器が効果を示さなかった」という設定があったり常時侵食して進化のための要因として取り込もうとしたりとトンデモナイモノなのだ。

ゆえに

「お前さん、お菓子ですよ。口に合うかは分かりませんがねえ」

「（モグモグモグモグ）」

ゆえに

「煎餅もありますよ」

「（バクバクバクバク）」

ゆえに

「羊羹もどうぞ」

「（モツシャモツシャ）」

ゆえに・・・なんだっけ？

「おいしかったかえ？」



「ガオウ！（旨かった！）」

「そうかいそうかい、そりゃあよかった」

あー旨かった。

## 第2話 アラガミ、気づくとのじ

ばあさんに飯を食わしてもらって、

日向ぼっこして、

落ち葉と戯れて、

裏山の木を切り倒して、

といった感じの日々を繰り返すこと早一月。

「グルウウウ（ばあさん）」

「よびましたかえ？」

最近ではばあさんとの意思疎通も前よりは格段に向上し大体ならどう思っているのかを伝えれるようになってきた。

気づけば何も言っていなくてもこちらの意思を理解することさえある。

ばあさんがハイスpekすぎる。

「グワア（水くれ）」

「あ、はいはいお水ですね」

俺はアラガミなので飲まず食わずでも死にはしないができれば欲しいものである。

ちなみにだが痛覚はある、というか物凄く敏感だ。

「はいよ、お水ですよ」

「グルグルウ（ありがと）」

と、うかんだかなじみ過ぎて忘れかけていたけどさ。

俺ってアラガミだよな？

ご近所さん（毎朝駅に向かって走って行くサラリーマン）は俺のこと見ても何にも言わなかったけど・・・

なんなの？

2M以上もある化け物見ても驚かないってなんなの？

### 第3話 アラガミ、驚くとのこと

そんな生活をして気づけばもう二年が経った。

ばあさんが言うには今年は西暦で1968年なんだそうだ。

ただ、問題が起こった。

そうこの世界に俺以外にも化け物がいた。

それは「BETA」すなわち。

Beings of the Extra Terrestrial

Origins which is Adversary of

human race 『人類に敵対的な地球外起源生命』

と呼ばれる、いや後にそう世界中で呼ばれることになる存在だった。ぶっちゃけて言ってしまうおう。

ここは「マブラヴオルタネイティブ」の世界に酷似したところであるということが判明した。

ばあさんは

「世間も物騒になりましたねえ、宇宙で戦争ですとえ」

と呑気に言っていたがその後の顛末を知るものとしては恐怖でしかない。

人類の大半が死亡し、最終的には選ばれた極少数の「人類」のみを生き残らせるという凶行に走らせざるを得なかった悪夢の序章が始まったのだ。

最近では字を書くという方法によってはあさんとのより正確な意思伝達ができるようになっていたのでいくつものことを聞いて確定した。

曰く、この世界では核爆弾は日本には投下されずにベルリンに投下された。

曰く、この世界の主力兵器は地上の戦術機、そして空中の戦闘機だということ。

曰く、この世界の日本は日本帝国であり国務全権代行者は政威大將軍であるとのこと。

ああこれはまず間違いなく「オルタネイティブ」の世界だ。

眩暈がする。

今まで化け物である自分ですら優しく受け入れてくれたばあさんやご近所さん達が、皆、そうごとく死んでいくのが分かってしまっただなんて。

認めたくないし、認めれるわけがない。

だが現実に第一次月面BETA戦争は勃発しオルタネイティブ2と思われる動きも感じ取れる。

じゃあ。

俺は何もできないのか。

いや違う。

俺は化け物だ、それも真正銘、それもBETAなんぞよりも潜在能力という点においては上の。

なら、俺がすることはただ一つ。

自分の怖されたくないものを「化け物」なら化け物らしく壊そうとするやつらを壊してしまえばいい。

#### 第4話 アラガミ、別れの時とのこと

それからさらに五年。

遂にBETAが人類の生活領域「地球」に浸出する年。  
ばあさんは寝込んでいた。

「グルウウウ（ばあさん、大丈夫か）」

「おやおや、心配されるほどには弱ってませんよ」

そんな軽口とも言えないことを言うものの介護とかには素人の俺が見てもどう考えても弱っていた。

最近では寝込む日も増え、外に出ることは珍しくなってしまった。  
おせっかい焼きな近所さんがわざわざ仕事に行く前と帰ってきてから介助をしてくれているが頼り続けるわけにはいかない。  
かといって自分はいまだにオウガテイルもどきからヴァジュラテイルもどきになっただけでどう考えても介護なんかできない。

「心配せんでも迷惑はかけんですえ」

「グラアアア（気にスナナし、頼ってくれ）」

「ふふふ」

こうはいうものの本器で困っている。

食事に関しては近所さんの作り置きがあるからなんとかなるが排泄関連の介護やら買い出しやらと問題は山積みだ。

買い出しに関しては最悪自分が動くにしても・・・さすがにこの四肢じゃあ排泄介護は不可能だ。

はたしてどうすれば・・・いきなり人型になったりすればいいのが人型になる要素のものを食っていないし・・・

「まあまあ、大丈夫と言っているでしょ？」

「グラアア（しかし・・・）」

そういえばあさんは眠りについた。

永遠の、眠りに。

次の日の朝、自分が見たものは満足そうに微笑んでこの世を去った  
ばあさんの姿だった。

## 第5話 アラガミ、落ち込むとのこと

ばあさんが死んだ日から二日、ご近所さんに手伝ってもらえばあさんの葬式を済ませて簡単なものだが神社の裏に墓を作った。結局俺はばあさんに頼り切りだった。

この神社に住んでいられたのもばあさんが取り計らってくれたおかげだ。

「グラアアア！（ばあさん、いままでありがとう）」

「悲しいのかね？だが悲しんでいても何も進まんよ。」

ご近所さんはばあさんから神社の土地の権利書を預かっていたらしく今まで住んでいたアパートから神社に移り住むそつだ。すなわち、俺の新しい家主はご近所さんあらため近藤さんということだ。

「とにかく、まずは掃除でもしようか。」

「グル（おう・・・）」

「30いかないような若造が言うのもなんだが、おばあさんもいつまでも引きずってほしいとは思わんぞ。忘れてはいかんが。」

たしかに近藤さんの言うとおりだった。

あのばあさんのことだ、天国だかなんだかわからんが「自分のことはいいいからやりなせえ」とでも言っているだろう。

「グルウウ・・・（ばあさん・・・）」



たったの5年だったがばあさんと過ごした日々は毎日が楽しかった。どこから仕入れてきたのかわからない羊羹を神社の縁側（なぜ神社にあるのかは不明）で食べ。落ち葉を集めて焼き芋をしたり。雪玉に砂糖をかけて食べてみたり。・・・なんか食い物関係ばかりだったけど、間違いなく充実した人生いやアラガミ生だった。

「グルオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

夜中に俺の遠吠えが響き渡った。

その後、近所迷惑というクレームが近藤さんのもとに多数届くこととなり、近藤さんと一緒に周りの家に謝りに行く羽目になった。

第5話 アラガミ、落ち込むとのこと（後書き）

しまらない終わり方だなあ。

うーむ、文才が欲しいものです。

## 第6話 アラガミ、期限を知ること

ばあさんが死んだあの日から、もう一年が経とうとしていた。近藤さんも神社で暮らす日々慣れ、毎日墓参りをしてから会社へと出かけて行った。

だが、俺は何も変わらない。

一年が経ったがまったくアラガミとしての進化が見えずヴァジユラテイル止まりのまま一年を過ごしていた。

俺の前世の記憶が正しければそろそろ世界人口がBETA出現前の三割減となるころだ。

焦りが生まれてきているのは自覚している。

自分は何をしているのだろう。

いまだ日本にはBETAが来ていないが、今頃大陸ではさまざまの数のそれこそ史上最大の数の人間が死んでいるはずなのに。

もしも、俺がもっと早く進化して長距離を飛行できるならば今すぐにもBETAどもを喰いつぶしてやりたい。

だが、現実として今の俺は陸上ですらせいぜい60km/hぐらいが限界なのだ。

「化け物」らしく守ろうと決意した日からもう六年が経ってしまったのだ。

今は夏の始まり、六月二十三日。

悪夢の日、西暦1973年4月19日から一年と二月ばかり。

果たして自分は間に合うのだろうか？

1998年、BETA日本上陸まであと14年。

ここ、横浜に後14年もすればBETAの大群が押し寄せ、果てはHIVEまで作られ、最後にはG弾まで投下され全てが無茶苦茶になるのだ。

・・・気持ち悪い、絶対にそうはさせない。

せめてここ横浜、いやこの神社だけでも守り抜かなくては・・・

## 第7話 近藤さん、道を語るのじと。

1974年7月6日、BETAが北アメリカ大陸に着陸したとのニュースが報じられた。

しかし、その後、アメリカはカナダ領内であつた着陸地点に対して戦術核の集中投下を敢行。

結果としてカナダの半分もの領域の核汚染と引き換えに北アメリカHIVEが出来ずに済んだのだつた。

「ふむ、これをどう思つかね。」

「グルルルル（これは・・・）」

「さすがにどうかと思うがね、まああくまで私個人の考えだが・・・」

「グワオオオ！（横暴すぎる！仮にも他国領土に戦術核だと！？アメリカは地球を不毛の大地にでもするつもりか！）」

それもそのはずである、主人公の知っている正史においてはアメリカは最終的に地球を放棄しG弾による殲滅を行おうとしたのである。結論から言えばアメリカは種としての存続、そしてこのBETAとの戦いの後を見据えて行動を起こしているともいえる。しかし、だからといって頭では理解できても感情が許さないものである。

「そうかお前さんはこれには反対か。まあ私も同意見だ。せめて非汚染兵器でどうにかすることはできなかつたものかと思うね。」

たしかにそうである。  
究極的には火力さえ釣り合えば普通のミサイルを多量に叩き込むことでもどうにかできたはずである。

だが、実際問題では火力が釣り合うなどということはない。  
それこそ核兵器一発で一般的なミサイルの数百倍もの火力を有するのだ。

確実に殲滅しようとするとしても核ミサイルを使わざるを得なかったのかもしれない。

「だが、これは今後のアメリカの行く先の縮図かもしれない。」

「グワ？（縮図？）」

「ああ、私には今後もこういう強攻策をとり続けてどんどん孤立してゆくアメリカが容易に想像できる。しかしすべてのものがアメリカを批判することはないだろうな。」

「グルルルル・・・（なんで・・・完全には孤立しないんだよ・・・）」

「それは単純明快だ。それしか解決策が無かった、と多くのものが心のどこかで思っているからだよ。」

「・・・」

この日、人類は二つの道を知ることとなる。

アメリカのようにそれしかなかった、と現状の最善策を取る道。

そして、理想によって最高、と言えるまだ見ぬ最善策を作り上げる道。

この二つを知ることとなる。

第7話 近藤さん、道を語るよのこと。(後書き)

なぜか近藤さんの回に・・・  
そんなはずでは・・・



## 第8話 アラガミ、戦術について学ぶとのこと

1975年。

この年、遂にソ連がBETA進行に耐えきれなくなり首都の移設を行う。

それに伴い核研究施設や軍需施設、さらに生活基盤部分の生産施設もどんと疎開を行っていく。

さらにこの年、いや正しく言えば昨年から続いていたものだがこの世界においての人類未発見元素「グレイ11」を利用した兵器開発が開始。

それと同時にBETAに対する大気圏外防衛システムとして、対宇宙全周防衛拠点兵器群「シャドウ（SHADOW：Spaceward Hardwares for All-Round Defensive Ordnances and Warheads）」が建造される。

しかしまだこのころは日本国内ではあまり大きな影響は起こっておらず。

大きな出来事としてはもともとこの世界の日本にあった空軍を解体して陸海軍に再編成したことであろう。

「遂に日本も対BETA用の再軍備が始まったか・・・」

「グルル（どういうことだ？）」

「お前さんも知っての通り、BETAには光線属種という強力な対空攻撃手段を持った種族がいる。そのために事実上大気圏内での空中作戦が不可能になっているんだ。」

「グウ（なるほど・・・）」

「だから不必要になった空軍を解体して陸海軍、それと大気圏外活動を行う宇宙軍、この三軍に再編背を行ったのさ。おそらく戦闘機はこれから戦闘機や宇宙活動用のシャトルなどの資材にされるだろうな。」

それも当然の成り行きである。

光線属種というのは1975年現在で二種類見つかり、光線種と重光線種の二種類である。

どちらともんでもない出力の光線を照射することが可能な種類であり最大有効射程距離は少なくとも数十？と言われており、射撃制度も異常なほどに性格であり高速で高度10000Mを飛行する戦闘機ですら撃ち落としてしまうのである。

これにより空爆などの戦術が使えなくなりお荷物と化していたのである。

余談だが現状ではアラガミに対して最も脅威なのはこの光線属種である。

少なくとも主人公はまだ熱量子攻撃に対して全く耐性を持っていないため、もしもまともに光線を食らえば即死である。

「・・・（光線属種か・・・）」

「まあ、陸海軍を増強したからと言ってどうにかなるものではないと思うがね。」

BETA日本上陸まで残り・・・13年。

## 第9話 アラガミ、焦るとのこと

1978 .

人類はその生活領域を急速にBETAに奪われ行き、遂にはユーラシア北西部制圧を許してしまう。

しかし人類はとてつもなく大きな犠牲の代償として後に「ヴォルクデータ」呼ばれることになる貴重なHIVE内の情報を入手。

またこの年、ソ連はBETA進行によって領土を東西に分割されてしまう。

さらに、中東が国家・宗教を超えて人類にとっての「聖戦」を宣言し一斉反攻作戦に出る、結果として一時的な戦線の押し上げに成功、しかしあくまで一時的なものであった。

「遂に大国ソ連が致命的な損害を受ける・・・か」

「・・・」

「第二次世界大戦以前からずっと強大な勢力を誇ってきた国家が壊れてゆく、なんともおかしなものだ。かつてはその有り余る力で宇宙開発先進国などと呼ばれるほど進んでいたものも全て、全てBETAによって台無しになったわけか。」

「・・・」

「それにしてもあの中東がこのように結束して何かを成し遂げるなんて果たしてだれが想像できただろうかね。「聖戦」か、たしかにこの状況下ではそういつても過言でもないかんもな。」

「・・・」

「お前さんはどう思う？」

「グルアアア……（これだけじゃあ時間稼ぎにしかない……）」

「……まあ、そうだろうな。圧倒的物量、さらに根本的な性能差、精神論で抑え込めるものではないだろう。だが、私はある種の感動すら覚えたよ。人類が共通の敵に対して一つになれることが証明されたのだから、まあ。」

「アメリカは別として、だ（アメリカは別だ）」

実際問題ではアメリカも一つになっている中に入るだろう。

ただ、そのやり方が違うのではないだろうか。

真実は分からない、おそらくアメリカ自身にさえ。

## 第10話 アラガミ、徴兵について知るとのこと

1980年、遂に日本に戦後以来初めてある制度が発令された、それは「徴兵制度」である。

基本的には特定年齢以上の男性を国家の選出で徴兵するもので現在の徴兵年齢は満20歳。

当然であるが近藤さんも徴兵年齢に達しているためいつ徴兵されてもおかしくない状況であった。

このころになると戦術機開発及び配備が激化し次々と新型が配備されていく、しかしどれもBETA戦線に大きな変化をもたらすものではなく大きな戦局の変化につながることはなかった。

それと同時にこれまで技術提供をしていたアメリカが諸国家の技術の成熟を理由に対外への次世代戦術機開発技術の移転を禁止。

また日本国内では対アメリカで行われていた第一世代戦術機生産・運用技術の獲得計画を終了、国内での戦術機の生産を開始する。

そしてそれに対応すべく日本では教育基本法の改定、英才教育・適正者抽出という手法をとることとなる。

「うーん、徴兵制度の復活か。後方国家であった日本がそこまでしなればならないほどに最前線は末期化してきているのか・・・」

「グルルルル（それよりも教育基本法の改定って・・・本当にここまでせっぱつまってくるとは）」

「たしかに教育基本法の改定は話題としては大きなものだね。だがしかしこの改定はまだ第一段階的なものだろうね。」

「グルアアア（どういうことだ!?!）」

「まだまだこれだけで済むはずがない、これからさらに状況は悪化していくだろう。それに今回の改正だけで対応しきれるとは到底思えないのだよ。」

「グウウウ（たしかに・・・）」

「それに、この徴兵年齢もこれからどんどんと下がるだろうね。それこそ世界大戦末期のころ、いや下手をするとそれ以上に。」

「・・・（そうか・・・だからオルタの原作では女性まで戦闘に・・・）」

「なんにしろまだこれは始まりに過ぎないのは間違いない、私もいつ徴兵されるか分かったものじゃないし一度徴兵されたら戻ってこれなさそうだしね。」

「ガウウ（そんなこといわないでくれよ・・・）」

「もしも私が何かしらの研究者とかなら徴兵を免れるかもしれないけれども。私はいたって健康な一般企業のサラリーマンだからね。」

「・・・（近藤さんが徴兵されるかもしれない・・・）」

「まあ、その時はあきらめて死地に向かうしかないわけだ。」

「・・・（・・・）」

現在32歳でいたって健康な普通のサラリーマンである近藤さんはいつ徴兵されてもおかしくないのは事実であり、ひとたび国から徴

兵礼状が来れば拒否権も持たないのである。  
果たして・・・

第10話 アラガミ、徴兵について知ること (後書き)

実は徴兵についてはかなり今後も変化していきます。

ですがいちいちその変化をばらばら筆者が書いていくとは思えない・



## 第11話 アラガミ、「化け物」を再認識すること

1982年。

この年、ソ連領であったアラスカをアメリカが50年という期限で租借することが議会承認される。

またそれに対する軍事的保険措置としてアメリカはユーコン基地を国連に対して50年間の無償貸し出しを行う。

さらにこの前年には北欧がBETA制圧領域となりいよいよ欧州圏に手がかった。

しかし悪報ばかりではなく設置が進められていたSHADOWが遂に運用開始、これにより大気圏外からの新たなBETAの侵入はなくなることとなる。

もうとつくに手を遅れであったのだが・・・

日本ではこの年になってやっと国内生産戦術機として後の82式（F-4J改）「瑞鶴」が配備される。

それと同時に国産次世代戦術機開発に向けて官民一体で技術開発が進められることとなる。

「ググるルル（近藤さんよ、わざわざライセンスを取ってまで国内で戦術機を開発する必要はあったのか？）」

「うーむ、それは人によって意見が分かれるだろうな。しかし少なくとも私はこれに意味はあったと思っている。」

近藤さんはサラリーマンとして働くうちに日本という国がどこまでも海外に頼っているというのが分かっていた。

（我々の生きる現代日本ではまだ「技術」においては他国より高水準であるとされ技術国家と言われているが、それでも実際問題は戦闘機などといった軍需関係技術では物凄く遅れているのである。）  
そしてこうは言いたくないのだが、「この世の中の技術でまったく戦争に関係しない技術は極少数である」というのが近藤さんの持論なのである。

特に航空技術に関してはほぼ全ての技術が戦争に関係したもしくは戦争のために作られた技術なのである。

（我々が乗る民間飛行機も元をたどれば大型爆撃機だったり輸送機だったりの技術がつかわれているのである。）

それゆえにせめて自由に使えなくてもその技術だけは手に入る、ゆえにライセンス形式に対してこのような意見を持っているのである。

「それにな、お前さん。アメリカがいつまでも無傷だとは限らないんだ。もしかしたらいきなりBETAが現れて崩壊するかもしれない、いやBETAに限らずに何かしら人類に敵対する「化け物」が現れて崩壊するかもしれないだろう。その時せめて技術をライセンススだろうがなんだろうが持っていればどうにでも出来るというものだ。」

「・・・」「化け物」・・・それもそうだ。自分がこの世界にアラガミなんかとしている以上はどんなアラガミがいきなりあらわれてもおかしくなんてない。でも・・・」

「まあ、そんなことにはならないことを祈ることしか私たちにはできんよ。それに、もしもBETAすら超えるような「化け物」が現れた日には人類はおそらく生き残ることをあきらめるだろうね、たとえそれが味方だとしても・・・だ。」

「（っ!?!?）」

「まあ今、私にできることは毎日真面目に仕事して適度に酒を飲み  
ちゃんと眠って規則正しい生活することだ。うだうだと考えても  
どうにもならんよ。・・・さて、ちよつと酒を取ってくるよ。」

「（生きることをあきらめる！？そんなことがあるわけがない、だ  
って味方なのに。なぜ？意味が分からない・・・）」

## 第12話 近藤さん、憤るとのこと

1988年。

この年、近藤さんが予想していた「教育基本法のさらなる改定」が起こることとなる。

行われた改定はもはや全面改定と言って差し支えない内容のもので、主な内容としては「義務教育課程科目の切り捨て」「大学の統廃合」「衛土育成主体主義」・・・などといったようなもので今までのものからするとあまりにも大きな変化であった。

また前年には日本帝国は国際連合常任理事国の一国となる、今回の追加によって日本のほかにオーストラリアも常任理事国化したのだが、この新常任理事国である日本とオーストラリアは拒否権が2007年までのあいだ凍結されている状態であり、事実上それほど今までの状態と変わったわけではない。

欧州においては各国が英国領に一時政府を構え国家機能自体の移転を行っているのだが、当然その原因はBETA進行である。

BETAは欧州もかなりの範囲を制圧し各地にHIVE建設を開始しており、その新造HIVEからのBETA戦力も相まって戦線は崩壊、この先欧州戦線は巻き返すことがなかった。

それとは別でアメリカが五次元効果弾通称すなわちG弾の実験に成功。

それと同時にBETA作戦としてG弾を使用した焦土作戦を提案、作戦内容はG弾によってHIVEを制圧、その後HIVE内からG元素を採取、G弾を量産しそのG弾によってまたHIVEを制圧する、というサイクルを繰り返し最終的には大量のG弾によってオリジナルHIVEを殲滅するというもの。

結果としては不採用となったのだがこれにより各国間でG弾議論が行われることとなる。

「やはりこうなったか・・・」

「グルルルル（うわあ、本当に近藤さんの言つとおりになっちゃまった・・・）」

「なるほど使える者は全て兵士として投入するつもりか、最近では同僚も気づけば減っているしな。これ本気で末期戦の形相だな。」

「それよりも問題なのがこれだ！」

「グラア（近藤さんが声を荒げるなんてらしくないね）」

「すまない、だが、アメリカは何を考えているのだ！？こんな案が通るわけがない！核兵器では飽き足らずにこのようなものまで作り出すかっ！」

「グルルル（まあまあ、不採用になったんだから・・・ね？）」

「お前さんはアメリカを甘く見ている。奴らは一度やりだしたら自らの「正義」とやらのままにどこまでもやり通すぞ、今にもっとトンドEMONAIモノをげほっげほっ！」

「グラアアア（なにやってんだよ近藤さん！咳き込むくらいならもつと冷静に話なよ！）」

「げほっ・・・」

「ガオ（ほら、水でも飲んで落ち着いて）」

「うむ、ありがとう。」

「（前に核兵器の話があつた時は冷静で俺をなだめる側だつたのな  
んでこんなに・・・？）」

果たして、なぜ近藤さんはここまで起こっているのだろうか？

それには彼なりの信念が関係している、それはとても複雑に見えて  
根の部分は単純なものだ。

近藤さんは核兵器については冷静だった、それは賛成こそしないも  
のの「ほかに道がなく使わざるを得なかった」からである。

すなわち手段がないからそうせざるをえなかった、ということには  
近藤さんはどこまでも寛大なのである。

しかしわざわざ破滅的手段を自ら開発してまで行うことを良しとは  
しないのだ。

ゆえに近藤さんはこのアメリカの作戦が許せなかった、ほかに研究  
の使用もあつたであろうに「わざわざ破壊兵器を開発しあげくそれ  
を使おうとしている」という行動が。

そして期限は迫っていく。

日本にBETAが上陸する1988年まで、残り10年。

第12話 近藤さん、憤ること(後書き)

もしもこの作品の資料が見たいという方がありましたら感想にてご連絡ください。

もしも連絡がありましたら、現在で判明している範囲内の設定を別途で投稿します。

そして今気づいたのですが、主人公の名前考えてなかったorz  
主人公の名前募集中です、候補は感想までお願いします。

第13話 正史、外れ始めるとのこと（前書き）

そろそろほのぼのが壊れ始めます。

そして今回と次回はおそらく主人公出てきません、それでもいいという方はどうぞお進みください。

いちおう読んでなくても後に主人公と近藤さんによる作中説明が入るので大丈夫だと思います、たぶん。



### 第13話 正史、外れ始めるとのこと

1990年。

BETAが本格的な東進を開始した。

この結果主戦場が東アジア・東南アジア・ユーラシア北東部へと移る。

またこの年にアメリカは新世代戦術機YF-22、後のF-22A  
ラプターの正式採用を決定。

四年にわたる開発競争に終止符が打たれることとなる。

そして・・・

所はいつもの横浜にある神社から移り、北アメリカ大陸。

ここで正史にはなかったある変化が起きていた。

「いったい、こらはどういうことだ？核の影響が予想以上に大きかったということなのか？いや、それにしては・・・」

「少佐殿！新しい報告が上がってきております。確認を。」

「ふむ、ありがとう。下がって良いぞ。」

「ハッ！」

ここは北アメリカ大陸アメリカ・カナダ国境付近の観測基地である。この少佐はこの基地の一応の責任者であり、それと同時に核汚染地域のデータ採取の担当者でもあった。

そんな彼に妙な報告書が最近上がってくるようになったのはつい最近のことだ。

その主な内容は、「ここ最近特定の範囲内の放射能濃度が極端に下がっている」というものとその地域にほぼ重なる範囲で「ここ二年ほどで観測される生物数が急激に減少、下手をすると絶滅するかもしれないほどで、すでに数種類的大型生物が半年以上発見の報告が出ていない」というもの。

「一体どういうことだ？まだ生物の減少だけなら放射能による影響と考えることも出来るだろうが・・・なぜその原因と考えられる放射能がこれまたここ数年で急激に減少している？訳が分からない、前例がなさすぎる、何よりも放射能が急速に低下するなんてことはまずありえない。だが、現実としてこういう報告が上がっているわけ・・・」

そこにノックとともに入ってくるものがいた。

「しよ、少佐殿！緊急事態発生です！しよ、正体不明の超大型生物が確認されました！」

「何だとっ！？BETAか！？いやだがどこから・・・」

「それが違うのです！あれはBETAなんかではありません！少なくとも既存の種類のどのBETAにも当てはまりません！」

「詳細を報告しろ！」

「h、はい！本日1344、観測部隊が低空飛行観測を行った時に発見、その後観測機は消息不明！おそらく未確認生命体の攻撃によって落とされたものと思われまます！また、最後に入った通信によると未確認生命体はおよそ・・・」

「なんだ？早く言えっ！」

「ぜ、全高およそ200M・・・全高およそ200Mとのことですよ！」

「な、なんだとっ！？200M！？馬鹿な！あの要塞級ですら60M前後なのだぞ！200Mといえばその三倍だぞ！？さん・ば・い・だ！」

「し、しかし！観測隊は地表500Mほどを飛行しておりました！それを落とすっ！」

「黙れ！光線属種なら・・・落とせるだろうが！」

「ですが！間違いなく未確認なのです！光線属種などと見間違えるとは！」

「なら光線属種でないというならなんだというんだ！この非常識な大きさなどあつてたまるか！」

少佐が信じたくないのも当然である。

既存のBETAでさえ要塞・突撃・要撃属種は10Mを超えるような大きさなのだ。

それですら戦術機でもないと対抗できない状態なのに、もしも本当に200Mなどという化け物が現ればどうなるかは目に見えてい

る。  
ただ、そこに待つのには圧倒的な蹂躪、ただ歩くだけで戦術機が潰されていく、悪夢以外の何物でもないだろう。

しかし、その悪夢は現実となり、着々と近づいていた。

『基地内全体に緊急放送！基地内全体に緊急放送！未確認の大型生命体を確認！繰り返す！未確認の大型生命体を確認！現在の距離は8000！繰り返す現在の距離は8000！戦術機パイロットは緊急発進体制に移れ！繰り返す！戦術機パイロットは緊急発進体制に移れ！』

「・・・まさか本当だというのか。嘘だ！信じられるものか！」

「少佐殿！そんなことを言っている場合ではないでしょう！迎撃命令を」

『！？未確認生命体は驚異的速度でこちらに向かっています！距離・  
・7000！6500！6000！5000！基地に、うわあああああああああ』

「そんな馬鹿なk」

1990年某日、16時27分現地時間。

国境に存在した基地が一つ、消えることとなった・・・

## 第14話 少佐、死にぞこなうとのこと

謎の「超」大型生命体による観測基地の襲撃の次の日、アメリカ国内の特に軍部は騒がしいことになっていた。

観測用のものとはいえ立派な基地がたったの数十分で壊滅するという異常事態、BETAであるかどうかなどということは考えずとにかく対策についてが話し合われた、はずだった。

なぜなら、もしかするとそのまま気まぐれに攻めてくるかもしれないのだから。

「そもそもだ！こんな化け物の存在を報告していなかった基地にすべての責任はあるのだ！」

「それをいうなら中将。あなたがあその最高責任者ではありませんか。部下に投げ出していたあなたにこそ責任があるのでは？」

「なんだと!？」

「今は責任の所在を問うべき時間だったか!? 中将! 少将!」

「責任などはあとでどうとでもすればいい。それよりも今我々がすべきことはいかにしてこの未知の生命体、いや生命かすらもわかっていないのか・・・とにかくこの未知の存在からアメリカを守り抜くかということだ。」

この場には北部方面の将官クラスの軍人がほぼ全員集まっている。これは異例の事態なのは間違いない。

だが、それほどまでに基地を強襲した未知の存在を脅威として感じているのである。

「現在わかっているのはこれだけです。まずこの未知の存在はここ数年で発生したであろうということ、そしておそらく周辺地域の放射能濃度の急速な低下や生物数の減少に関係があるということ、最後に少なくとも陸上を200?/h以上の速度で走れるということ。たったのこれだけです。」

「くそう！せめてどういいう行動をするとかは分からなかったのか！？」

「それが・・・」

「中将殿、それについては自分が説明させてもらいます。」

「む、少佐。もう動いていいのかね？まあ、唯一の生き残りである少佐本人から話を聞けるのであればそれに越したことはないが・・・」

「いえ、大将殿。お気遣いは結構です。今自分がなによりもしたいことは奴を苦しませて殺すことです。そのためならば、まったく。」

「そうか・・・しかし無理はするな。それで結局死んでしまったはどうにもならん。」

「ありがたいお言葉です。」

「そんなことより早く説明をせんか！」

「中将・・・」

「中将殿、分かりました。では説明をさせていただきます。そもそも始まりは」

その後少佐は一時間以上もの時間を使いその場にいた全員に対して自分の汁うる限りのことを話しつくした。

しかし、その内容は絶望としか言えないようなものであった・・・

「という訳です。以上で終わりです。ご質問は？」

「「「「「・・・」」」」」

将官たちは質問が無かったのではない。

いや、聞きたいことなら山ほどあっただろう。

未知の存在の弱点や行動パターン、ほかにもいろいろと。

しかし今少佐に聞いても何もこれ以上は分からない、ということを理解したのだ。

「なるほど・・・少なくとも200Mか・・・頭が痛い問題だ。」

「亜音速で地上を移動だ！？本当にそいつは生物なのか!？」

「・・・」

聞く人によって印象に差はあれども、全員の思考はとある共通点へと向かっていた。

すなわち絶望である。

亜音速で陸上を動く全高200M以上の物体、さらにBETAのように異常に堅い骨格？を持っており基地に体当たりをしたにもかかわらず傷らしきものは肉眼ではとらえられなかった。

果たしてこのような「化け物」にどう対処しろというのか。

結論から言うとこの会議では方針が決定することはなかった。

しかし、後に「地上に太陽が落ちた日」と呼ばれることとなる大規模攻撃の、その原因となったのは間違いなくこの会議であったのであろう。



第14話 少佐、死にそこなうとのこと（後書き）

ちよっとしたシリアス回でした。

これが正史からの剥離の本格的な始まりです。

果たして、どうなっていくのか、期待せずにお待ちください。

## 第15話 アラガミ、絶望すること

アメリカの観測基地壊滅より五日後・・・  
その事実は隠しきれぬニュースとなって世界各国に届いていた。  
当然、日本にも。

「（・・・やばい、やばいぞこれ）」

「ふむ、『未確認生命体がアメリカの観測基地を強襲！新たなBETAか！？』か・・・」

「（いやいやいやいや、200Mとか少なくとも正史ではそんな大きさのBETAはいなかった、そういなかったはず！）」

「『おととい、アメリカの国境付近にある観測基地が何者かから攻撃を受け壊滅したことが、アメリカ北部軍高官の会見で判明した。今回基地に攻撃を加えた敵は過去に観測されたことのない生物でありBETAかどうかにもいまだに不明。』なるほど」

「（まずいって、これ多分アラガミだよ・・・正史ではこんな事件無かったもん。さすがに前世の記憶が薄れてもこれだけ大きな事件だったら覚えてるって。どうしよう・・・アラガミ側から人類に攻撃を仕掛けたとなれば・・・）」

「『現在わかっている情報ではこの生命体は恐ろしく大きいらしく、少なくとも200Mはあったとのこと。また唯一の生き残りであるアーノルド少佐の証言によれば時速五百キロメートル以上もの速度で特攻をしてきたとのこと。』・・・五百キロメートル？」

「(えええええ、俺の知ってるウロヴオロスはそんな速度で移動しないよ！？少なくともゲーム中ではそんな速度は出なかったよ！？なにそれこわい。)」

「『また、基地内から回収されたブラックボックス内に奇跡的に残っていた写真が左図である。』たしかにこれは今までのBETAのデザインとは一線を画しているな・・・」

「(なにそれ？BETAうんぬんの判断基準そこなの！？っていうかこれは・・・ウロヴオロス？いや若干何かが違うような・・・でも・・・アラガミなのは確定かな、はははそれこそデザインの。)」

「『今後、アメリカ軍は対応策を協議し、決定次第行動に移すとのこと。』まさか・・・G弾でも使うつもりか・・・しかし、今は使わざるを得ないし・・・」

「(おお！アメリカならできる！多分、熱量弾ならアラガミだって倒せる・・・進化してなければ・・・いや、でもG弾の耐性なんて持っていないよな？持っていないでくれ・・・)」

「『また、未確認生命体が発見された地域ではここ数年で急激に放射能濃度が低下するなどといった怪奇現象が起こっており、その関連性についても気になる場所である』・・・放射能濃度が低下？」

「(それって・・・十中八九、放射能を捕食してるね。うん、もう俺しらね。)」

アラガミは考えることをやめた。

どう考えても絶望、考えれば考えるだけマズイ情報に繋がっていく

のだ。

それはやめたくもなる。

結局十分ほど思考停止状態は続く、まあ復帰したのだが。

「ん？お前さん、どうした？なんだかもものすごく落ち込んでいるように見えるが……」

「グルルルルル（あ、うん気にしないで……はははは）」

正史からの脱線は加速していく。

## 第16話 悪夢、加速するその1

未確認生命体の観測基地襲撃より十日後。

この日、遂にアメリカはこの敵に対する行動を開始する。

その作戦はとても単純なものだった。

少数ではあったが完成していたG弾を敵に打ち込み消し飛ばしてしまおう、という。

だが、実際には環境被害のデータを取ろうとする試みや採算に合うのかの実証、さらには他国に対するG弾の有用性のアピールとしての意味すら含んだ行動であった。

「あの化け物を消し飛ばしてやれる日が来た・・・十日も待つことになるとは・・・塵すら残さずキレイに消えて地獄で後悔しろ！」

「あ、あの・・・少佐殿？」

「なんだ？」

「い、いえ。何でもありません・・・そ、そういえば作戦開始時刻まで残り一時間となりました。配置についてください。」

「ああ？」

「いえ、ですから、その・・・」

「分かってるよ、配置につけばいいんだろっ？じゃあな。」

「ハッ！・・・荒れてるなあ、無理もないけど、とぼっちは食ら

いたくないなあ」

少佐はもともと基地に執着があつたわけではないし、部下思いだつたわけでもない。

しかし、自分の管理していたものが経つた数分のうちになすすべもなく壊され、しかも自分だけが生き残つてしまったのだ。

居場所がなくなつてしまいたただイラつきだけが強くなつていった結果があつた荒れ模様であつた。

そして一時間などこの警戒態勢の中ではあつという間に過ぎてゆき、発射まで残り五分となつた。

「未確認生命体を補足。動きはありません。」

「ミサイル発射シーケンスは順調。弾頭の搭載も済みました。」

「ハッチの解放完了。点火準備も完了です。」

「全行程の完了を確認。 1 2 3 0 まで残り4分・・・」

「3分・・・」

「2分・・・」

「もう少しだ・・・あと1分もすればあの化け物はミンチになる・・・」

「1分・・・」

「人間の本気を思い知れ、化け物！」

「3・・・2・・・1・・・発射！」

12時30分、G弾弾頭ミサイルは予定ど通りに発射される。

12時42分、G弾は予定の地点にて着弾、爆発が確認された。

人類の持つ最高の攻撃手段によって未確認生物、いやアラガミは倒されたかに見えた・・・  
しかし、悪夢は加速する。

「衛星画像映りました！間違いなく着弾しています！作戦成功です！」

悪夢は

「これで・・・」

終わったのではない

「あの化け物は・・・」

新たな力を喰らい

「終わりだ！」

進化したのだ

「・・・新しい衛星画像入りました！・・・目標、完全に沈黙、いえ、動いている？目標、生存しています！？」

その日、地上に太陽が生まれた。

黒くまがましい光を発するG弾という名の太陽が地上に落ちたのだ。

そしてアラガミはその太陽すら喰らい、さらに進化した姿で、産声を上げた。



第16話 悪夢、加速することのこと（後書き）

アラガミ（主人公でない）が暴走しております。

なんというのか魔改造が進んだ結果、これだれが倒せるの？といったものになりつつあります。

どうしたのか・・・

## 第17話 悪夢、空を壊すとのこと

「そんな・・・馬鹿な・・・」

「嘘だろう?」

「生きている・・・だと」

その日、アメリカの最終兵器にして最高火力を誇るG弾の投下により終わると思われていた「未確認生命体」との接触は・・・その未確認生命体、後の「アラガミ」がG弾による攻撃を耐えきったことよって、混沌としていった。

「馬鹿な！そんなことがあってたまるか！五次元効果だぞ！？重力偏重にどうやって耐えるというんだ！どれだけ常識はずれなんだあの「化け物」はあ！」

それもそうである、そもそもG弾というのはあらゆる質量物がもれなく受ける重力を兵器として使用したものであり、それゆえに回避不能・防御不能の攻撃となるのである。

それが、間違いなく質量物であろうというものに耐えられてしまったのである。

実のところ、このアラガミは耐えきれているわけではない、事実一度はアラガミは全身の90%以上ものオラクル細胞が崩壊したのだ。ただ、アメリカ軍にとっては運の悪いことに、そうただただ運の悪いことに「コア」を破壊しきれなかったのだ。

そしてアラガミはG弾という要素を学習し、対応し、回復し、進化する。

もしも、もしもだアメリカ軍がもう一発だけでもG弾を打っていたら？

もしも、重力偏差の広がりコアに届いていたら？

もしも、再生後すぐに止めを入れていれば？

アラガミは間違いなく消滅していたことであろう。

だが、たとえ運が悪かったにしてもこの先に待つのは悪夢のみである。

G弾にすら耐性を持ち始めたこのアラガミを倒すすべは、もはやアメリカ軍には、無い。

「くそがつ！すぐさま次のG弾を用意しろ！使える限りの武装を使って消し飛ばせ！」

もう遅い

「1400までに発射準備を整えろ！無理だ？やれと言ったらやれ！」

荒ぶる神は

「申請が必要？そんなもの緊急事態宣言で無視しろっ！今こいつを殺さなかったら確実にマズイ！」

自らを

「核も用意しろ！汚染？知るかそんなもの！どうせもう手遅れなくらい汚染されてるわっ！気にするな！」

傷つけたものを

「早く！はや」

「目標に動きあり！これは・・・？こちらを見ている？」

見逃したりなど、しない

「膨大な熱量が目標から確認されました！・・・！じゅ、重力偏重が、重力偏重が目的周辺から消えていきます！」

「っ！？やはり放射能の一件もこいつが・・・」

「あ、ああああ、ああああ」

「どうしたオペレーター！」

「目標が重力偏重を、まるでG弾・・・いえ、ML機関のように制御しています！」

「なんだと！それはどうい・・・」

ズッドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

大地を揺るがす発射音とともに、アラガミから何かが空に向かって打ち出された。

それは正史において人類の最終兵器になるはずだった、いや、なったものの力の断片であった。

そして、それは空にあった人類の防衛線を・・・それどころか空そのものを。

打ち壊した。

## 第18話 アラガミ、開発を試みるとのこと

さて、アメリカでは混沌としてきティルこの頃。

日本のアラガミが居座る神社ではちよつとした事件が起きていた。

「グルルルル（なんで、今まで隠してたのさ）」

「いや、隠していた訳では・・・」

「グレア！（言い訳無用!）」

「いた、だからな？お前さん落ち着け、そんなに怒ることでもないだろう？」

近藤さんとアラガミが喧嘩に近い状態になっていたのである。

そもそもの原因は今より数時間前にアラガミが近藤さんの仕事鞆からとあるものを見つけたことだった。

それは近藤さんの社員証であった。

本来ならそれがどうしたというものなのだがそこに書かれていた企業名や近藤さんの役職が問題であった

### 今より数時間前の回想

「グルルル（なんだか、この体にもすっかり慣れたなあ・・・）」

「グレア（休日だし掃除でもしようかな）」

アラガミの神社での生活の習慣の一つに休日中に必ず一回は掃除す

る、というものがあつた。  
そのため今日も掃除道具をひっぱり出してきて掃除をしていたのだ  
が……

「ゲ？（ん？）」

アラガミが見つけたのは、近藤さんの仕事鞆からいろんなものがぶちまけられているような状態だったのだ。

このかばんは本来なら留め具にかけておくもののだがなぜかこの日は地面に置かれていた、いや正しくは落ちていた。

「グルルウ（うわー、留め具が壊れて落ちたのか、近藤さんに頼んで今度修理してもらわないとなあ）」

そういいながらも前足と口だけで器用にぶちまけられている書類などを集めていたが、そこで問題の社員証が目に入った。

「……（そういえば、近藤さんがどんなところで働いているのかわからないよな）」

「……（見たって罪にはならないよな？）」

「……（よし、近藤さんはいないし見てしまおう）」

そしてその社員証に書かれていたのはこのような内容だった。

近藤忠保

藤澤総工

機甲武装部門部長

「・・・グレア？（・・・へ？）」

「お前さん、帰ってきたぞ。たしか買ってくるものは・・・」

そして現在に至る・・・と

「グルルルル（さてと、これを一般的なサラリーマンというから始めようかな）」

「痛い、頼むからのしかからないでくれ・・・いや、本当に痛いんだ」

「グル（質問にだけ答えてくれればいいよ、質問にだけね？）」

そこには拒否権などなくただ近藤さんはうなずくしかなかった。それほどにこの時のアラガミは迫力があつたのである。

「ガルルル（ます、この部門にいたのはいつから？）」

「入社当時から」

「グレアアアア（じゃあ、部長になつたのは？）」

「1988年、40歳の時」

「グ（最後に、何で言わなかつたの？）」

「聞かれなかつたから、それと私はこれが普通だと思っていたから」

「・・・」



「・・・」

「グウウ・・・（だろうと思ったよ・・・）」

「いや、そのだな・・・隠していたわけではないんだ、それだけは信じてくれ」

「グワアア（まあ、近藤さんのことだから本当にそうなんだろうねえ）」

アラガミは勝手に納得し始めていた。

勝手に怒って、勝手に静まる、少々身勝手なことである。

「グラア（で、具体的には何を作ってるの？）」

「う、む、それが・・・私たちは基本的に設計ばかりでな・・・まあ戦術機とか戦闘機とかいろいろとやっているが特許や資源や問題だらけでなあ、最近はやや営業ばかりやっているような気がする。」

「・・・（それなら、自分の原作知識を投入出来たらいいんだけどなあ）」

そこに数枚の書類が目に入った。

国産技術次世代戦術機開発計画に関する書類であった。

その中にはアラガミにとっても見覚えのある戦術機である後の不知火も見られた。

しかし、アラガミが見入ったのはそれではなく、藤澤総工が提案した「NX-01」という奇妙な機体だった。

「・・・（これは？原作では見なかった、いや設定すらなかった？）」

藤澤総工の提案したNX-01という機体は色々な意味で可笑しかった。

まずこの型番、今までのTSFどころかYやXですらないNXというもの。

それにあんまりにも決まっていない部分の多い提出書類。異常なまでに国内技術にこだわる姿勢。

どれをとっても奇妙なものであった。

「ん？ああ、それか。その空白部分は開発をしながら新技術で埋めていくと上が言っているな。現状では多重構造フレームとマルチセンサーぐらいしか決定していないんだよ。」

ここでアラガミはとんでもないことを考え付いた。

いっそこれを究極の機体にしようじゃあないかと。

自分はアラガミで単体としては素晴らしい力を持っている、しかしだ今のままではこの神社だけですら守り切れるか分かったものではない。

ならば、周りを強くすればいいのではないか、そう思い至ったのである。

「グラア（ねえ、これの開発にかかわらしてよ）」

こうして意外な方向でも世界は正史から外れだした。

第18話 アラガミ、開発を試みるとのこと(後書き)

まさかの開発スタート、なぜこうなった。

## 第19話 南極、調査するのじつ

前話から所変わって南極、ここにも正史から外れた存在が居座っていた。

それはやはり「アラガミ」であった。

それはこのような形で怪談のように各国南極基地隊員の間で語られていた。

曰く、南極点には白い竜のような生き物が居座っているとのこと。

曰く、その生き物は周りの天候を自由自在に操り吹雪などを起こすとのこと。

曰く、その生き物に気に入られたものは南極点に可笑しいほどにすんなりで行けるとのこと。

曰く、その生き物は気に入らないものには悪天候を与え音もなく喰らっていくとのこと。

曰く、隊員達が死体すら見つからなかったときはこの生き物に喰われているとのこと。

曰く、今まで死体が見つからなかった隊員たちの手記などにはことごとく「異常なほどの悪天候」であったということが書かれているとのこと。

他にも色々があるが比較的信憑性が高いとされている六個のうわさを紹介してみた。

このような噂が流れたしたのは大体、1970年あたりである。

最初はただただ噂であったのが、1981年に正体不明の足跡が確認されたことにより急激に信憑性を持つようになり、もはや隊員たちの中では「南極点には何かいる」というのは共通認識とかがしていた。

しかし、かなりの時間が経ち何度もその生き物を調べるための隊ま

で送り込まれたにもかかわらずいまだに姿は確認されていなかった。そして、1990年に第12次南極点未確認生命体調査隊が結成されることとなる。

今回の調査隊の主な任務は「南極点への到達」「未確認生物の痕跡の発見」「可能ならば未確認生物との接触」であった。

「にしても、遂に俺らが南極点にいけるんすね！先輩、なんだか興奮します！」

「お、おう、まあ興奮はするが・・・とにかく落ち着け桐峰。」

「まあまあ、隊長。新入り君が興奮するのも仕方がないって。初めての任務がこれだもんね。それはテンションも上がるさ。」

「まあ、そうだが。事実俺も初めて南極点に行けるとなったときは興奮した。だが、落ち着け桐峰。」

「そうだね・・・本当にあの時の隊長のはしゃぎ具合といたら・・・ふふふ、新人君よりも凄かったかもね」

「ちよつと黙ってくれないか・・・藤堂、お前がしゃべるとややこしくなる。後、過去のことを持ち出すな。」

「分かったから、その服の中側から向けてきてる拳銃をどうにかしてくれない？」

「へ？拳銃？」

「大丈夫だ、セーフティはかかっている、今はな。」

「おお、怖い怖い。僕もまだ死にたくはないから自重するよ。」

「お前ら、何やってんだ・・・隊長、あんたは止める役でしょうが、何一緒になって騒いでんだ。というか怖いから拳銃を持つな、セーフティーでも持つな。」

「・・・すまない。」

「そういえば新入り、お前に朗報だ。」

「はい！なんですか！」

「どうもやつこさんは期限が悪いそうだが、見る外は大荒れ。これならやつこさんの姿を見れるかもな、まあ死ぬ直前だろうが。」

「ええええええええええ・・・って、あれ？そんなに天候悪いように見えませんか？」

「ああ、さっきのは嘘だ。本当の朗報は」

「副隊長はそのさらっと嘘をつく癖をどうにかした方がいいです。」

「本当に直した方がいいよ、いつか痛い目見るよ？」

「藤堂、お前にだけはいわれたくない。」

「どづいつことかな？新田副隊長？」

「新田、結局何を言いに来たんだ？」

「ああ、えーとだな。俺の言いたかったのはだ、今回の調査隊は俺ら日本組を中心に作られるらしい。ついでに言うと六人隊だそうだな」

「む、六人は少ないないか？」

「そうだね、いつも少なくとも二十人以上で作られていたのになんで……」

「そうなんすか？てつきり少数精鋭的なもんだと思ってっただす。」

「（新人りは純粹でいいなあ）」

「？」

「おい、話をつづけるぞ。まあ理由についてだが、おそらくは各国がBETAやなんやと鬼気迫った状態でこっちに人員を割けないというのが正解だろう。」

「ふむ、まあそうか。」

「という訳で残りの二名は出発直前に合流するそうだな。以上、報告はこれだけ。質問のある奴は挙手しろ、無視するかもしれんが。」

「……ねえ、これ朗報ではないよね？」

「……」

そんなこんなで、ここ南極でも正史からのずれが確実に大きくなっ

ていくのであった。

第12次極点未確認生物調査隊・日本

隊長：伊藤 隆文

いとつたかふみ

副隊長：新田 聡

にったさとし

隊員1：藤堂 依織

とうどうよりおり

隊員2：桐峰 正

きりみねただし

計四名



## 第20話 南極、出そろったのじゃ。

南極、そこは人類の地球上最後の未開拓地であった場所。

今では人はその中でも極点と言われる場所に旗を立てその周りには各種研究施設が立ち並び極点到達競争の時代とは別の形で熾烈な戦いが繰り広げられていた。

しかし、このマブラヴオルタネイティブの世界においては事情が違った。

そもそも極限環境に人間の長期間住める環境を作り出すだけでも大変なことである、そこにその出資などを行っている本国・企業がBE TAという「人類史上初めての共通の敵」に遭遇し、自らの住む場所すら失った中ではたしてこのだれがわざわざ莫大な資金を、資源を投入するだろうか？

現状ではまだ一部の大国および後方国家が資金を出しているがそれすらここにきて降ってわいた「アラガミ」という新たな脅威のせいで減っていくのは明らかである。

ようするにこの南極調査も何かしらの大きな成果を出さなければ今回で援助をきられてしまうだろう、ということである。

それどころか、今の今まで縮小こそあれど根本的に削除対象となりえなかったのは今までの各隊の見つけ出してきたこの地に住みついている「何者」かの証拠があったからである。

だが、それすらも決定打にはなりえず、今回の第12次調査にて結果が出せなければ打ち切りという通達が隊長、およびアメリカ・ロシアから出向してきた隊員二名には伝えられていたのである。

「というわけだそうだ・・・ノーリッジ少尉、質問等はあるか？」

「いえ、隊長。こちら事前にも伝えられていたものとはほぼ同じなので問題はありません。」

「では、ヴェロニカ少尉もこれで・・・？あの、ヴェロニカ少尉？」  
「・・・」

「ヴェロニカ少尉、隊長が確認を取っているのです。反応をしてください。・・・こいつ、まさか。・・・隊長、少々お待ちください。」

「ん？あ、ああ。」

「スウウウウウ・・・ヴェロニカ少尉！ヴェロニカ・エヴァンジェ  
ル少尉！起きろ！」

「へ！？は、はい！ヴェロニカ。エヴァンジェルです！階級は少尉  
です！何事でしょうか！？」

「・・・」

「ヴェロニカ少尉・・・もしかして寝てましたか？というか寝てい  
ましたね？職務怠慢は減俸ですよ。」

「いえいえいえいえ！私は寝てなんかいませんよ、隊長！た  
だ、意識が飛んでいただけで・・・」

「馬鹿が！それを寝ていたというんだ！お前は合同訓練の頃から本  
当にいつつもいつつも気づいたら寝てやがって・・・！」

「・・・ノーリッジ少尉、ヴェロニカ少尉も・・・喧嘩しないで  
話聞いてくれますよね？ねえ？」

その瞬間にこの少尉二人に悪寒が走った。  
今の今まで温厚そうで、事実ややのんびりとした雰囲気醸し出して  
いた隊長から脂汗を書くような不気味な気配が漏れ出したのだ、  
これは恐怖以外の何物でもあるまい。

「す、すみません。（小声で）おい！ヴェロニカ少尉とにかく謝罪  
しろ、早く！」

「（小声で）え、えつとでも寝てなんかいないんだよ？」

「（小声で）言い訳は良いからはや・・・」

「二人とも謝罪とか今はどうでもいいから話、進めようか？」

「「はいっ!?!?」「」

アメリカ出向

隊員：ノーリッジ・ステイブンス少尉

ロシア出向

隊員：ヴェロニカ・エヴァンジェル特務少尉

こうして南極に六人の調査隊員がそろった。

第20話 南極、出そろじゆのじゆ。(後書き)

いきなり始まった南極についてのお話はいったんここで終了です。  
これからしばらくはまたアラガミの若干普通ではなくなり始めてい  
る日常がだらだらと続きます。

## 番外話 料理、アラガミの日々

さて、読者の皆さん、皆さんが「これこそ至高の食べ物」と思うような食べ物はいったいなんだろうか。

カレー？

から揚げ？

牛丼？

ピザ？

パスタ？

トカゲの揚げ物？

ビビンバ？

世の中の料理の種類はとてつもなく多い、今列举したものはその中のたった1%にすらならないほどに多い。

そして、これはそんな料理について起こった神社的一幕である。

それはとても天気の良い日のこと。

平日であり、近藤さんは会社に働きに行っていた時間であった。

アラガミの生活は専業主婦のようなものになってきており、ここ数年では買い出しまで行うようになってきた。

さすがに人のように荷物を持つことはできないので、アラガミ専用の荷車を近藤さんに作ってもらい、買い出し表を首にかけて週に二、三回程度出かけるのだ。

メーター級の体を持つアラガミが出歩いてパニックにならないのか？と疑問に思う方もいるだろうがそれについては問題ない。

長年、神社に住み着いているおかげで地元住民はみんな「ああ、神社の子か」というような認識を持っているのである。

ちなみに、地元住民の子供たちにとっては七不思議的存在（主にいつからいたのか、なんという生き物なのかなどという点）として知

られており、度胸試しに使われることすらある。

そして今日も荒神は荷車を曳いてなじみの店へと向かって行っていた。

「（今日はカレーかなあ、近藤さんは料理には関心ないからいつも適当なんだよな。せめてもうちょっと考えて食材を書いてほしいけど・・・）」

「お、神社の犬じゃないか。また買い物か？」

「ガウ！」

「おお、そうかそうか！で今日のは・・・んー毎度のことだが何作るんだこれ？」

「グウウウ（さあ？）」

「まあ、いいか。まあちょっと待っててくれすぐにとってくるからな。」

さてなぜ、何を作るのか？などと店主が言ったかというところ、神社の食材の注文が「今作るものなんて考えずにそのうち使うだろうから補充しておく」という近藤さんの考え方で買い出し内容が創られているからである。

そしてアラガミはこのはたから見ればときとうとしか言えないような材料から日々料理を作り出すのである。

「おお、取ってきたぞ。これであってるか？」

「・・・ガウ！（・・・OK！あつてる。」

「よしよし、じゃあお代は月末払いだからな？近藤さんに忘れないように言っといてくれよ。」

「ガオオ・・・（う、うん・・・）」

とこんな感じに目的の食材を集めるため精肉店、八百屋、豆腐屋、もろもろ回って残りが酒屋のみ（当然近藤さんが飲む酒を買いに行くわけだが）となったところであらガミは思った。

「（カレー作ろうと思ってたけど・・・カレールー、あつたっけ？）」

ようするに献立に不備が見つかったのである。

そしてアラガミは今は亡きおばあさんと近藤さん以外とは意思疎通が難しいため買い足しも不可能、詰んでしまったのである。

「（くつ、せめて人の言葉が話せれば・・・！くそつ、早く人型になりたい！）」

ここで大幅変更が必要になった献立。

だがそこは主婦アラガミである、すぐに今ある食材を思い出す。

そしてそこから導き出されたのは・・・

「（今あるもので作れそうなのは・・・ご飯、味噌汁、魚が無いから代替えでハンバーグ、後は漬物と絵枝豆、これぐらいかな。）」

和食くずれのメニューであった。

魚が無かったのはアラガミからすればかなり大きい、ここまで和食

らしいメニューなのになぜかハンバーグ（肉料理で和風なのを作るうとしなかったのかということとは置いて）、地味に雰囲気があるだ。

結局、帰宅してそのまま料理を開始することに。

アラガミは自らの身体能力を存分に発揮し、犬のような姿でありながらも口に包丁、お玉、鍋など調理器具を加えることによって料理を可能としていた。

はつきり言って、わざわざそこまでしてまで料理をする意味が分からないと思うだろう。

しかし、近藤さんは料理が上手くなく、それも食べられないほどではないという微妙な味（本人も自覚している）であったため、アラガミが耐えられなくなり「この体でも料理できる方法はないか!？」と模索してこのやり方にたどり着いたのだ、拍手を送りたい。

「（ふう、なんとか出来上がった・・・）」

「ただいま。」

「グルウ!?!（帰宅が早い!?!）」

「ん?・・・これは味噌汁の匂いか。」

「ガオオ（うん、まあねえ）」

「じゃあさっそく食べるとするかな。」

「グ!（手を洗ってきてください!）」



「あ、ああ。」

そうしていつもより二時間も早く帰ってきた近藤さんと食事をし、後片付けに入ったころ。

「あの味噌汁、おいしかったがもう少し薄味にしてくれないか？私的にはもうちょっと・・・」

「ガウ！（自分で作ってから言ってください！）」

「すまない、だが作ると思ったのはお前さんだろうっ？」

「・・・（はあ、そうだよね）」

「ということ、酒を飲んでくる。」

「ガ！ガルルル！（ちょっと！？なぜそうなる！？）」

こんな日常もありだと思っ。

日々、人類がその生きる場所を削られていく中でもこんな日常はあるもんだ、そう思っ。

番外話 料理、アラガミの日々（後書き）

という訳で本編の時系列のどこかに入る日常のお話でした。

## 第21話 アラガミ、名前を貰うのじと

さて、あんなこと（第18話参照）があったおかげで少々妙なことになるっていた神社内であるがまた平常運転に戻り始めていた。そして近藤さんがふとこう言った。

「そういえば、お前さんには名前が無かったよな。」

「・・・ガウ（・・・あ）」

そうである今の今までよく気付かなかったものである。

実はアラガミは「お前さん」とか「犬ころ」とか「神社の」などと呼ばれていて名前は持っていなかったのである。

そして荒神本人があんまりにもそういう状況に慣れてしまったため疑問に思うこともなく十年以上もの間名無しの状態で生活を送ってきたのである。

「む、だが果たして今の今までなぜに気づかなかったのか・・・？」

「ガウワア（さあ？）」

「お前さんは疑問には思わなかったのか？」

「グルルル（俺も今の今まで気にしてすらいなかったよ）」

「「うーむ（グルル）」」

とこんな調子であった。

結論から言つとアラガミは代名詞的な呼ばれ方と通称（近所の野良

猫に勝手にシマシマとか名付けたりするのと同じような状態) だったわけで本当の意味で名無しだったわけではないのだが。

「という訳でお前さんの名前を考えようと思うのだが・・・」

近藤さんの前には真新しい数冊の本と筆に和紙が置かれていた。

その数冊の本というのはいわゆる命名辞典というものであり人名事典二冊にペット辞典一冊という構成だった。

「私には子供もいないし親戚とも縁がないからな、こういったことは初経験という訳だ、でこういった本を買ってきたわけだ」

「(うわあ、命名する気満々だよこの人。いや命名するのは良いとして人名事典はペット的存在な俺にはいらなんでしょう。それになんで三冊もあるの?)」

「そこでだな、私は致命的な問題を見つけた。それわだ、お前さんの性別が分からないということだ。そもそもお前さんが生物学的にどういう種類の生き物かも私は知らないわけだ。さて、これはいかに。」

「(そういえば俺の今の体が性別どっちかなんて考えたことなかったな・・・それにアラガミはヴァジュラ以外では性別が確認されてなかったような)」

「ついでに今だから言ってしまうとお前さんについては訳の分からない部分も多い。例えば排泄なんかについても私はそれらしい行動を行っているところを見たことはない。ふむ、こうやって真面目に考えてみると謎だらけだな。」

「グウウウウ（まあ、そうだけど・・・）」

「まあ、私はお前さんが何者であろうとこの神社から追い出すことはしない。何よりもお前さんは私に美味しい飯を食べさせてくれるし掃除や洗濯まで、家政婦以上のことをやってのけているわけだ。感謝することはあってもお前さんを追い出すいわれはない。それに・・・私個人としてもお前さんのことは好きだからな。」

アラガミは本当に幸運だったと言えるだろう。

知らない世界にそれも人間としてではなく「アラガミ」として放り出された、とはいえその世界は自分の知る世界に酷似しており、放り出された場所も元の世界でいう所の日本、その上に今は亡きおばあさんや近藤さんのように理解のある？人のもとで生活が出来て、今では近隣住民からはおおよそ友好的に接してもらえている。もしもこれがアメリカなどだったなら、研究所などに捕まえられていたら、話は全く違っただろう。

「ウウウウ・・・」

「そうだな、お前さんの名前は、おばあさんが託したこの神社の名前にならって」

「『国守』、うむ国守としよう。」

そうして名無しだったアラガミは晴れて姓名ではなく称号のようなものとはいえ『国守』という名前を貰うこととなる。

## 第21話 アラガミ、名前を貰うとのこと（後書き）

主人公無双マダー！？

という訳で後々重要になりそうな名付け回でした。

さっさと戦術機開発するなり主人公強化するなりしろやという意見もありませんが、作者の執筆能力的にもう少し後になりそうですm(・・)m

## 第22話 アラガミ、論破することのこと（前書き）

今回の話はアラガミがガオガオ言っていないませんが気にしないでください、お願いします。

それなりに理由がありますので見逃してください。

## 第22話 アラガミ、論破すること

名前を貰ったとはいえ、正直なところ生活は変わらない。

近藤さんは今まで通り「お前さん」と呼ぶし近所の人たちは「神社の」とか「犬ころ」とか「ポチ」とか・・・まあ変わらない。

しかし、アラガミにとってはそれなりに大きな変化であった。とここまでではこれからの話には関係はない。

そんな中、アラガミは近藤さんと「次世代戦術機」についてで結構真面目に話をしていたのだ。

「さて、お前さんが前に開発に関わりたと言っていたがな。それについての返答をしておこうと思う。」

「うん」

「流石に無理だ。たとえ私が部長でもやっていいことと悪いことがある。」

「まあ、そうだよねえ」

「だが、お前さんが考えたことを社に伝えることぐらいならできないこともない。」

「と、いっつと?」

「要するに、お前さんの考えたものを整理して書類として提出することは出来る、まあ名義は私のものになるが。」



「それで十分だけど？」

「・・・いいのか？たとえお前さんがどれほど素晴らしいものを作っても全て私の、いや社の物になってしまふんだぞ？」

「いや、だって俺のものになってもどうにもならないでしょ？」

まあ、これはアラガミの言うとおりである。

所詮人間でないアラガミがいくら特許などの権利を持つとも全く持つて意味がないのである。

「・・・それでいいならそうさしてもらおうが。で、結局お前さんはなぜにあんなことを言い出したんだ」

「なんか・・・こう・・・ね？ティンと来たんだ」いつからお前はNTになった」なんでNT知ってるの・・・」

「いや、なんだかそう言わなければならぬ気が・・・」

「・・・」

「言いたくないなら聞かないが・・・さすがにその嘘はいかんだろう。」

「いや？嘘ではないよ。」

「いやだからいつからNTに」そのネタはもういいんじゃないかな」・・・」

メタ発言多いな、おい。

それもこれも作者が悪いのだが、ってあれ？俺が悪いのか？

まあそんなことは置いておいて、二人（一人と一匹）は本格的に話し出した。

あんなしよつもない話をしていたとは思えない真剣さである。

「で正直な話をする、決まってるじゃないことが多すぎない？このNX-01って。」

「うぐ、それは・・・」

「大方コンペの主催者からも文句言われてるんじゃないの？」

「ぐはっ！」

「というか他の候補がかなり良好っばいんだけど、特にこの不知火とかいうのとか・・・」

「・・・」

アラガミは正論を放った！

近藤さんの精神に231のダメージ！

アラガミは推論を放った！

弱点を突かれた！近藤さんの精神に661のダメージ！

アラガミは比較論を放った！

オーバーキル！近藤さんの精神に1329のダメージ！

へんじがないただのしかばねのようだ

「あれ？近藤さん？おーい！」

「・・・分かり切ったことをそこまで言わなくなったって、いいじゃないか。」

「いや、だってさあ。」

「ふ、たしかにさ文句も言われた、たしかにほかの候補は良好だ、しかし私たちの作るNX-01は負けたわけではない！」

「というか勝負の舞台に立ってすらいないよね。」

「なんと・・・」

アラガミの追撃！

近藤さんの精神に致命的なダメージ！

「まあまあ、そう落ち込まないで。」

「いや、すまん、なんだかすまん。」

果たしてこれで大丈夫なのか・・・  
非常に不安である。

### 第23話 アラガミ、構想を練ること

さて前話からアラガミがガオガオ言っていないがその原因は近藤さんにある。

いや正しくは原因とは言えないのだが、流れはこういったものである。

開発云々の話をするときに今までの意思疎通方では正確さが足りないと感じたアラガミが近藤さんに何かしらのコミュニケーションツールを要求する。

近藤さんはそれに対して音声合成ツールを内蔵したパソコンを職権乱用気味に会社から持ってくる。

そしてそれを使うことにより今までよりもスムーズな（今まではアラガミの吠え方やしぐさ、場合によっては神に書いたりした文章を使ってコミュニケーションをとっていた）意思疎通が可能に。という訳であった。

どこのスイ チだ、それというツツコミは受け付けない。

『まず現在の戦術機に足りないもの、それは耐久性だと思う』

「いや、それについては第一世代の運用で『いやそうじゃなくてん？』」

『俺の考える耐久性は攻撃的防御性とも言ったらいいのかな？要するには攻撃してきた側が逆に被害を受けるような設計、そういうのが必要だと思う』

「・・・たとえば？」

『装甲自体を武器にさせる、ほら今でもいくつかあったよね？名前は思い出せないけど』

「う、む、あったような、なかったような・・・」

仮にも開発に携わるものがそれでいいのか近藤さん。

しかし、このころは日本帝国国内ではアラガミの言った設計思想はまだ検証段階であり正直相当マイナーな技術なのである。

事実、この技術思想が正史の日本帝国で本格的に反映されたのは建御雷であるため10年ほども先取りしていることになる。（実際には計画段階も含めると話は変わってくるのだが）

『例えば、装甲を刀みたいな形状にして接触時に相手に攻撃できるようにするとか、BETAによる取りつきに対抗するために脚部にパイルバンカーを組み込むとか』

「前者は置いておくとして後者は出来ることなら搭載したいものだな・・・おそらく取りつき被害が大幅に減るぞ」

『そういえばリアクティブアーマーなんて物もあったよね、あれの爆発指向性と重量問題をどうにかしたら帝国製の戦術機にも搭載できるんじゃないかな？』

「なるほど、いやそれならパイルバンカーとリアクティブアーマーを合わせてだな再運用可能にしてはどうだ？」

『おお！たしかにその方が威力も上がるね。でもそれこそ重量大丈夫なの？』

「・・・第二世代以降の戦術機は厳しいかもしれん。というか現在

の回避優先主義の戦術機思想とは相いれん。だが、これはどうにかして搭載したいものだ」

『それとOS面も出来れば改良したいよね、例えばだけどOSをモジュール化することによりコアユニットとモジュールソースさえあれば戦術機だろうが戦闘機だろうが動かせるように・・・とかできない?』

「・・・それは難しいな。それもソフト面ではなくハード面でだ。正直な話、それだけのことをやってのけるハードウェアは現状では入手しづらいしそれなりに大きい。お前さんの言うような「なんでもそう撃銃出来る」というのは・・・ちよつと無理がある」

『うーん、それはどうしようもないね。じゃあ、俺の考えの本題に入るけど・・・戦闘機を復活させられないかな?』

「え?」

『え?』

「いや、光線属種がいる現状では戦闘機は無理じゃないか?色々と」

『いや、流石に俺もいきなり戦闘機単体で運用しろなんて言わないよ。俺の考えは・・・』

その時にアラガミが語ったものはこのようなものだった。

まず戦術機の「跳躍ユニット」に連結し音速越えで地上すれすれを飛びながら攻撃できる特攻使い捨て型の強襲兵装を開発する。

その兵装の推力として通常のエンジンだけでなく重金属粒子噴射を使うことにより推力の底上げと光線属種の攻撃の減退を狙う。

強襲により一気に光線属種へと攻撃を仕掛け数を大幅に減らす、この際に強襲兵装内に簡易武装コンテナを搭載することにより短期での制圧力を高める。

そこである程度以上数を減らした段階で対光学兵器用の拡散塗料を塗布した先行爆撃機による攻撃。

続いて通常機による大規模殲滅爆撃を敢行、戦術機の強襲・先行機の爆撃により数が減った光線級による攻撃を重金属粒子で減退させ被害を最小限に。

といったもの。

「なるほど・・・もしもその通りに行つたならば産廃状態の戦闘機に日の目が見えるし産業的にも素晴らしいことだ。だが、現実問題としてそれは可能なのか？数十キロ以上もの距離があつても落とすてくるのだぞ？」

『正直言つて自信はないよ。でももしもこれが成功すれば戦術機や戦車でちまちま削るのよりはるかに多くのBETAを殲滅できる。』

これは賭けだよ、もし成功すればいろんな意味で変革を起こせる。』

「一応は提案してみよう、しかし・・・これは・・・どうなるだろうな」

果たしてアラガミの考える次世代構想は吉と出るか凶と出るか。

戦術機開発だけではなく戦闘機関連にまで手を出したアラガミなのでした。

第23話 アラガミ、構想を練るとのこと（後書き）

アラガミが珍しくシリアスに真面目です。

それにしてもなんとという無茶苦茶な考え、これは・・・



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8520w/>

---

GOD EATER ALTERNATIVE LOG

2011年10月30日06時57分発行